



9月16日 KAMIYAMA BEER 見学

iv 全体成果及び評価

学校連携の観点では、昨年から引き続き城西高校食品科学科と連携して神山小麦を使った商品を販売できたことは、成果の一つであった。コロナの感染拡大の状況とも重なり、思うように活動ができないことも多かったが、「ふるさと納税」の資金を手に商品開発に取り組み、町内のマルシェで販売することができた。また、課題研究の活動の中で3年間をまとめた冊子「まめのくぼプロジェクト」を制作した生徒がいた。「この場所をもっと知ってほしい」「これから入学する中学生や小学生にも知ってほしい」という気持ちをもって制作を進め、下級生にとっても参考となる記録が残せたことは成果である。今後、この冊子を活用していけるとよい。

v 今後の対応と課題

本校には保健所の営業許可のとれる施設・設備がないため、販売するには地域のパン屋や施設との連携が必要になってくる。生徒や教員のコミュニケーション、地域の方々とのやり取りを丁寧に重ねていきながら、今後も地域の中で加工・販売ができる道筋を作っていくことが必要になってくる。

各施設の状況を踏まえた上で、教育活動への展開に向けた協力関係を築いていくこととあわせて、販売に関する運営費用の管理についても検討していく必要がある。

② 神山蕎麦の栽培

i 取組について

栽培管理

神山蕎麦の栽培は2年目である。昨年度、神山町下分の竹内律子さんから種を譲り受け、栽培に取り組んだ。しかし、獣害によって、全滅した。校内の畑で種取りを目的に栽培し、10キ

口の種を保存した。本年度はこの保存したものを用い、栽培した。

2021年9月9日：播種

コムギの後作の土地に1㎡当たり80gをばらまきした。生育中は、電柵の設置と周囲の除草を行った。

(写真) 生育中の様子



20日目



40日目



70日目

11月30日：収穫作業

脱穀および選別をした。選別後の収量は50kgであった。



2022年1月21日：食味試験およびレシピの検索

食味試験では、神山蕎麦と市販の中国産を用意し、茹でたものを比較した。

レシピを調べ、共有した。



ii 生徒の感想

- ・蕎麦のたねまき作業でばらまきをしました。こんな適当な方法で発芽するのかと疑問に思いました。先生によると蕎麦は発芽までに水もやらずにこれでいいそうです。また、ばらまきだと草も発生がほとんどないそうです。14日後に見たらほとんど発芽していました。また、栽培してみて気づいたことは、違う地域では、夏蕎麦栽培もできるらしいので、これからやってみてもいいなと思いました。
- ・蕎麦について調べることで、食味したことでもいろんなことを深く知ることができた。このような機会をもっと増やしてほしい。地域ごとの違いや成分についてももっと知りたい。
- ・蕎麦の調理方法を調べてみて、かりんとう、お汁粉、クリスピーが作れると知れた。学校が

難しいそうなので、家で作ってみたい。そば米汁は、家でも食べたことがあるので、みんなで作ってみたい。

- ・蕎麦を食べてみて、未熟なものだったためかうすい小豆のような味。柔らかいおかゆのような食感でした。香りは、ほぼありません。市販の粉にしたものも舐めたら香りが感じられました。

iii 成果と今後の課題

成果は、まめのくぼで蕎麦の栽培ができたことである。獣除けの電気柵と木柵が有効であった。課題は、次の点である。①食品加工施設が本校にない。製粉機や加工品の販売の作業で外部の施設を借り受ける必要がある。②コロナウイルスの感染防止の対策のため、蕎麦打ちの体験、調理実習ができなかった。③生産量が少ない。畑地を拡大し、収量を増やす必要がある。

(2) 道の駅販売活動

① 目的

道の駅は、「休憩機能」、「情報発信機能」、「地域の連携機能」、という3つの要素を持ち、神山校で生産した地域の商品販売したり、日頃の学習成果の情報発信にしたりという、地域活性化効果を狙っている。また神山町の経済の活性化や消費循環の喚起を大きな目的として道の駅で販売活動を行う。

② 実施日

- ・令和3年7月10日（土）午前8時30分から午後2時まで
- ・令和3年11月23日（火）午前8時30分から午後2時まで

③ 実施場所

徳島県名西郡神山町神領字西上角151-1

④ 参加者

- ・令和3年7月10日（土）【神農クラブ員10人・森林女子部5人・城西高校10人】
- ・令和3年11月23日（火）【神農クラブ員3人・防災クラブ2人・3年課題研究3人・2年チームプロジェクト5人・森林女子部5人・城西高校8人】

⑤ 実施内容

i 令和3年7月10日

販売物は、神農クラブが夏に栽培しているカボチャ・ジャガイモ・トウモロコシ・キュウリ・ミニトマト・神山小麦の種を袋詰めで販売した。森林女子部は神山町産材の木工商品積み木をネットに入れて販売した。また、2年生の部員が制作した記念キーホルダーを1個500円で販売した。1年生は道の駅の入場者に木で遊べるワークショップを行い、小さい子供達に大人気だった。友情出店していただいた城西高校の「そよかぜ販売所」生徒の皆さんはお菓子やクッキーなどの食品加工商品を販売した。

ii 令和3年11月23日

農産物は、秋冬野菜が中心で中でもアンノウイモやダイコン・ハクサイ・レタスが面白いように売れた。加工品では3年生が課題研究で取り組んでいる神山小麦の商品開発で制作したお菓子や、2年生のチームプロジェクトで食堂復活チームが料理したアンノウイモコロケや神

山小麦を使った唐揚げを販売した。参加者からは「美味しい！」と高評価をもらった。今回も城西高校の「そよかぜ販売所」チーム学校で育てた「パンジー」「ビオラ」などの草花を寄せ植えにして販売した。クリスマスも近いことから寄せ植えが大人気だった。毎年この時期に神山校防災クラブが炊き出し訓練を道の駅の駐車場で実施している。今回も炊き出しに「トン汁」を避難してきた参加者を想定して、お椀いっぱいの暖かい汁を100名分振る舞った。森林女子部も焼き芋をするなどのパフォーマンスを行い十分存在感をアピールすることができた。

⑥ まとめ

温泉の里神山みちの駅の農産物直売所は、中山間地域の生産者が、その土地で収穫された農産物を安く提供できる場所である。農産物を通じて消費者と生産者の信頼関係を築き、消費者ニーズの溝を埋めて、地域同士の関わりを持つことをこの活動で学んだ。

農産物直売所のメリットとしては、中間売業者を介さないで安く農産物を購入できる他、生産者情報が把握できるので、道の駅に寄ってくれたお客さんも安心して農産物を購入できる。一方で農産物直売所のデメリットは、路上で販売されている農産物にはほこりや排気ガスなどの汚れが付着していることや、消費者が生産者の畑の状況まで把握できないことでもある。デメリットはあるが、道の駅のような農産物直売所を利用することで私たちは学校で育てた新鮮で良質な農産物を美味しく食べることができることは違いないと自信を持って言える。



7月10日（土）道の駅での販売活動の様子



11月23日（火）道の駅での販売活動の様子

4 地域を学びの場とした実践

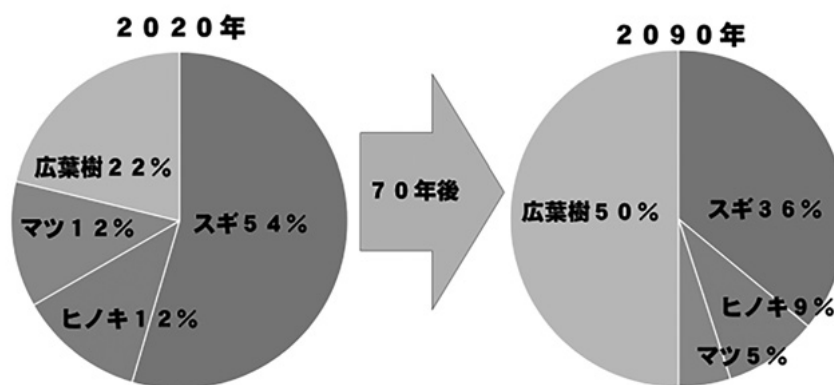
(1) 神山町をフィールドとした「森林ビジョン」

① 取り組みの概要

神山森林ビジョンとは、神山町が目指す森林の70年後の姿のことをいう。神山の森林が生態系機能を高度に発揮するため、森林の適正配置と立地条件に応じた整備により、70年後には（広葉樹林+混交林）と針葉樹林の面積比を5対5にすることを目指し、環境保全を優先する場所は「環境林」、木材生産に適した場所は「生産林」と位置づけ、環境林と生産林の面積比を5対5とすることを旨とする。（図1）また、生産林の林齢構成を平準化し、若齢林、壮齢林、高齢林のバランスがとれたものにするを旨とする。本校は演習林を管理しており、造園土木科3年生の教科「森林科学」で週2時間林業関係の授業を行い森林環境について学習している。また、部活動として森林の資源の有効活用と林業後継者不足の現状を伝える活動として「森林女子部」が頑張っている。神山町は、町にある環境林と生産林のバランスの良い森林を目指し、鮎喰川の良い水質の継続、森林空間を利用した観光交流、神山杉を使った家作りなど様々な可能性を加えた「神山森林ビジョン」を令和元年6月に策定しており、神山校も様々なプロジェクトと連携し積極的に協力している。以下の取組が、令和2年度に実施した「神山森林ビジョン」に係わる活動である。

- a どんぐりプロジェクト
- b 1年生林業体験
- c 伐木講習資格取得講習・林業体験
- d 森林女子部の取り組み

神山町の森林資源の現状と70年後の比率



(図1)

② 取り組んだこと

a どんぐりプロジェクト

平成27年に神山町は「このまま何もしなければ人が居なくなる」という危機感のもと、地方創生戦略として「まちを将来世代につなぐプロジェクト」を策定した。平成28年度には、神山つなぐ公社が設立され7つの施策を設定した。そのひとつに「すまいづくり」があり、平成29年度から造園土木科の先輩達が「どんぐりプロジェクト」として、つなぐ公社スタッフの二級建築士「赤尾さん」、ランドスケープデザイナーの「田瀬氏」などの多くの担当者の皆さんと、本プロジェクトを進めてきた。どんぐりプロジェクトは、神山町の広葉樹を種から繁殖させ神山校で生育させ集合住宅や、新しく計画される学校や寮に定植していくプロジェクトである。

現場施工は令和元年（5月31日、6月6日、7日、21日の合計12時間）、令和2年（6月16

日、17日、23日、24日、7月1日の合計15時間）と歴代の先輩から引き継いで2期目の住宅設計チームの一員として、植栽、施工を行った。また、土木施工業者の昇旭建設さんと造園業者の森田緑化さんらも専門人材に加わっていただき、総勢30人で取り組み令和3年4月に完成した。

結果及び考察として、「植栽、施工、管理」までの一連の作業を計画通り進めることができた。特に、測量や植栽の工事では、学校での授業の成果が生かされた。鉢上げ後の苗木の生育も順調で次回の植栽工事に引き継いでいきたい。本取組がこの神山地区の景観作りのモデル事業となることを期待している。

今後の課題として、今年度担当した3年生の施工工事は、無事に計画は完了したので、今後は、後輩の皆さんに順次、第3次住宅地の植栽整備、管理作業を託すこととなっている。

生徒の感想として「先輩から引き継いだプロジェクトを最後まで完成させたことが嬉しい」「神山の樹木の種から4年間掛けて育てた既存樹木の移植は、大変だったけど卒業しても神山の集合住宅に見学に来たい」「プロの職人さんと一緒に仕事ができ貴重な実習体験となった」など多くの経験と技術が身についたことをすりかえりシートに記入していた。

おわりに、本プロジェクトは、平成29年度から継続して取り組んだ。関わっていただいたランドスケープデザイナーの田瀬氏をはじめ、神山つなぐ公の社集合住宅設計チームと本校生徒が力を合わせた取組となった。生徒が得た成果として、どんぐりなど鮎喰川流域の在来種の種取りから育苗、植栽、管理までの一連の流れを行い、これまでの造園土木科の授業・実習での学びを生かす場となった。そして、普段、目にすることが少ない建築業や造園業の職人の技も間近で体感できる機会を得たこと。また、プロジェクトを通して地域景観の成り立ちを学ぶ機会にもなった。今年度は、現場で竹垣を施工し、植栽整備に参加し、どんぐり等の苗木を後輩たちに引き継ぎ、作業をつなげていきたい。



(図2)



(図3)

b 1年生林業体験

徳島県では全国に先駆け、平成17年度から「林業プロジェクト」を展開した。高性能林業機械の導入により、木材の生産性が大幅に向上し、若者を中心に林業従事者が増加するなど、徳島県の林業は着実に活気を取り戻している。こうした成果を基に、県は県材産を増産する目標を掲げた「新次元林業プロジェクト」を平成28年度に開始した。「新次元林業プロジェクト」は、現場の即戦力となる人材を育成する「林業後継者育成事業」を開講した。「林業後継者育成事業」は毎年、林業事業のねらいやそれに伴う研修の状況、今後の期待について、徳島県林業戦略課の方が神山校の生徒を対象に開講している。本校も神山町が森林ビジョンで描いている後継者不足の解消に向け林業後継者育成事業を推奨している。

城西高等学校神山校は、演習林が有り、森林の授業や総合実習で間伐体験や、集材作業を実

施している。また、2年生には造園土木科が伐木責任者、チェーンソーの資格取得を行っている。こうして林業体験を行い林業従事者への道もあることを伝えるなど、進路選択の幅を広げるため1年生は、とくしま林業アカデミーオープンキャンパスに参加している。

結果と考察として、今年度神山校から先輩5人が、林業アカデミーに入学し、林業関係の職場で即戦力として活躍している。進路希望調査をとっても2年生が2名、1年生が2名、林業関係の仕事に就きたいと意欲を示している。また、課題研究のテーマを決めるとき、木工作品を作りたいと希望した生徒が16人中8人も手を上げ、木に関係したテーマを設定する生徒が50%もいることに驚いた。先輩が、木で何かものづくりをしているのを見て、興味がわいて来ている。自分でもできると感じている生徒が増えてきているのも現状である。

今後の課題、「林業の未来には若い力が必要」、とくしまアカデミーは林業を志す若者たちの就職先となるのが、県内の森林組合や林業関連会社、育林から伐採まで、会社によって事業内容もさまざまであり、継続性がない。「山に入ると、伐採期を迎えた木でびっしりと埋め尽くされている状態となっているそのため、木材生産量の増産を実現するためには、新しい担い手の力が欠かせない」と話す林業会社の経営者もいる。「業界内では、新しい人材を求めている企業が多くあるが、ある程度の基礎知識を持った新人が入社してくれるのは本当に有り難いこと。機械を扱うための資格取得や、安全性への配慮などを学ぶことができる林業アカデミーの存在は、今後ますます重要になるはずである」という意見もある。



(図4)



(図5)

c 伐木講習資格取得講習・林業体験

林業における労働災害の60%は、チェーンソーを用いた伐倒作業中に発生している。いずれの作業でも作業に着手する前の準備は大切だが、特に伐木造材作業では、林分の状況、地形などの作業条件を把握することが極めて重要である。こうした、林業の作業知識を十分に把握し、定められた規則を的確に守る目的で、毎年、2年生が徳島県林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合神山支部の協力の基、学科2日、実技講習1日の合計3日間に渡る講習を受講している。

結果と考察として、服装と保護具の重要性を学んだ。安全の第一歩は、服装からとも言われ安全で清潔で身軽なものを使用すること。特に山の作業なので派手で目立つカラフルな色が最適であることを学んだ。作業道具の準備も重要で、林業作業を行う前には、作業を行う林分の事前踏査やその結果を踏まえて、必要な作業道具をそろえておくことが大切である。使ったら元の位置にかたづけるという心構えが重要である。また、悪天候時の作業では、強風、大雨、大雪などの悪天候のため危険が予想されるときは、作業を中止すること。労働安全衛生法規則第483条に「悪天候時の作業禁止」と記載されている。緊急連絡体制も災害発生時等の緊急時における体制の整備、確立を図ること。熱中症予防対策、火災予防対策、ハチ刺され予防対策、

危険な毒中植物や野生動物に十分認識を持って伐木作業を行わなければならないことをこの講習で学んだ。

今後、学校林での安全な作業確保のためこの講習を継続していく必要がある。引き続き、徳島県林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合神山支部の連携が不可欠となる。



(図6)



(図7)

3年生は、林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合が協働で、高性能林業機械の操作方法を、学校林や神山町の県有林で作業体験を森林専攻生や環境コースにさせていただいている。山林で、伐倒・木寄せ・造材を行うハーベスターや、玉切りにして運搬車に乗せるプロセッサと運搬するフォワーダの運搬操作を体験した。現場では、高性能機械の作業工程の留意事項や高性能林業機械を用いた作業システムについて指導を受けた。チェーンソーによる伐採方法では、小系木の伐採方法について間伐材を使って実際に倒木した。

結果と考察として、大型の高性能林業機械の操作は学校の演習林では体験ができないので、学校にとっては貴重な体験としてとらえている。生徒も「良い経験になって、すごく楽しかった」といい感想があった。集材作業も、機械なので目的の場所に楽に設置でき、安全で安心して作業ができることに感動していた。

今後の課題として、学校林での実習は倒木や間伐が容易にでき、安全な実習地が確保でき、役場の方や県の林業関係者の方も良い場所と推奨してくださり、演習林の良い有効活用となっているが、実際に木を運び出すとなると、容易に集材できない、現在は1m程度の丸太にして人力で運んでいる。こうした集材作業が今後の課題となり、支援や助成してもらいたいところである。



(図8)



(図9)

d 森林女子部の取り組み

森林女子部は、徳島県内の林業後継者を増やし地域の林業活性化や学校活動のPRを目的で立ち上げたプロジェクトチームである。これまでは、徳島県木材利用創造センターや、徳島県林業関係者や森林保全に取り組んでいるNPO団体及び行政関係者に対しSDGs推奨に係わるプレゼンテーションを行い地域の環境問題にも定義を発表する活動を行っている。森林女子部は様々な機会をとらえ、このSDGs17項目の基礎となる「グリーンライフ」の一つである山の働きの持続可能な取組に協力していることを伝えた。森林は水源の元となり、台風時は、大雨で河川の氾濫や増水で家屋の浸水という水害の原因となり、日常生活に大きな影響を及ぼすことを伝えることができたのは成果として評価ができる。そのために、私たちは、学校林で間伐や除伐等の正しい木の伐採方法を学び、伐採した跡地に針葉樹ではなく広葉樹を植えていく活動を継承していくことが、森林ビジョンとの取組に結びつくと考えた。

今後の課題として、まだまだ国連が目指す30年後の持続可能な取組について高校生がどれだけ理解しているかまだまだ未知の世界である。今後この取組を浸透させ理解していく必要がある。次に、神山町が目標としている70年後の森林ビジョンを1年1年つないでいくことが大事であるととらえた。(図10)

森林女子部のもう一つの活動として本年度は、募集活動の一環としてオンライン発信による全国の中学生に神山校の学校案内や、特色ある部活動の紹介や、地域ぐるみで生活している学生寮「あゆハウス」の取組みを発信した。7月には、地域みらい留学全国合同説明会があり、東京・愛知・兵庫・神奈川などの中学生がオンラインで参加した。(図11)参加した中学生は来年神山校を希望するため積極的に参加していた。中学生からの質問からは「森林女子部なのになぜ男子がいるの?」「今行っている活動は?」「部活で一番楽しいことは何?」など、積極的に質問をしていたのが印象に残っている。また、9月には神山町主催で行われた「神山地域留学2DAYS」があり県内外の中学生が、1泊2日で5組、神山を訪れ学校や寮や町内を見学に来た。体験活動では森林女子部と神山スギを使った積み木キーホルダーを中学生とデザインし制作した。(図12)思い思いのデザインを描き高性能レーザーカッターで作品を仕上げお土産として持って帰った。今年度はコロナの中、多くのイベントや活動が制限されPRも十分に実施することができなかった。そんな中でも徳島県主催の木づかいアワード2020活動部門で準グランプリを受賞した。徳島県も森林女子部の活躍を評価し応援して頂いていることが証明できた。今後も神山町の林業活性化と林業後継者不足の解消に努めPR活動を積極的に行っていく。(図13)



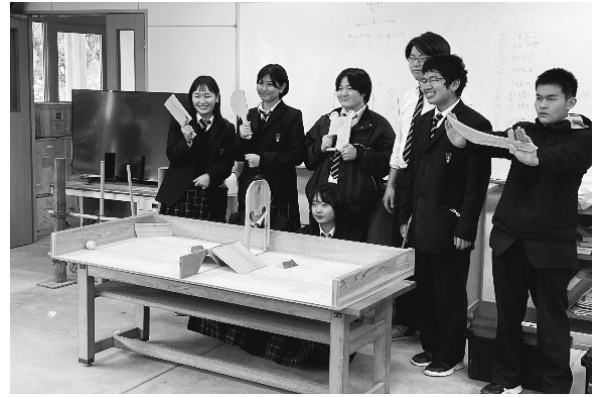
(図10)



(図11)



(図12)



(図13)

③ 取り組みの成果

神山町の山は、かつて林業が盛んであった頃、先人達が子や孫を想い、将来のために財産としての木をたくさん山に残してくれた。一方で、少子高齢化や雇用場所の減少による都市集中化などの影響で神山町の人口減少や林業の市場を取り巻く環境が変わっている。こんな中で、林業の仕事だけで山を考えることはどうかという話も聞く。当時の選択について否定するつもりなく、今だから気づけることもあると思う。生徒達によく問うのは、「今を生きる我々にできるのは、これらをどうとらえてどう将来に残していくのか」、「神山町では、今の山をよりよく将来に残して行くため、今後、山とどう向き合っていきたいと考えていくか」と質問する。生徒は「今ある知識だけで考えず、山がもたらす周辺環境への多様な影響、資源としての可能性など、将来を見据えどのような山が神山町にとって望ましいか、視野を大きく広げいろんな大人の意見や、高校生の意見を共有し、考えることが大切だと思っています。」と言う。みんな献身的な前向きな意見が出た。そのための第一歩として、この城西高等学校神山校と神山町の「森林ビジョン」との連携は、現在、山に携わる様々な人に合い森林機能の現状を把握し、山で働くそれぞれの視点からの話を聞くことで、山について新しい気づきが生まれる場になればと考えている。



(図14)



(図15)

④ 今後取り組むこと

新たな森林ビジョンの連携として令和3年度は、森林の生育に関わる神山町の山や川の調査を計画している。人工林と天然林の土壌に影響する光の強さと光合成速度や温度と林木の生長と水の循環について専門的な立場の指導を得て学習して行く。専門的経緯のある大人から学習意欲や、課題に向かうプロセスを評価してもらい生徒、一人一人に自信を付けさせることが3年目の展望

だと考える。

神山町の林業活性化協議会は「神山町バイオマス利用促進協議会」を今年度、新たに立ち上げ、神山町の燃焼機械導入状況調査を実施している。本校もこの調査に協力している。町は、国の山村活性化支援交付金を活用して木質バイオマス利用促進の取組を行っており、その一環として燃料機械導入の現状調査を神山町の公共施設や団体企業・民家等に調査を先駆けて実施している。将来的には、現在使用しているボイラー・ストーブ等の燃料機械の使用から神山産の木質バイオマス燃料を促進させ、限られた燃料資源の分散利用に協力し持続可能なSDGsの推進に協力していく目的で、今後も城西高等学校神山校も神山町森林ビジョンと連携を図り、全国のモデル校となれるように頑張っていく。

さらに、徳島県農林水産部は「徳島木のおもちゃ美術館（仮称）」を板野町にあるあすたむランドに設計中である。この美術館は、赤ちゃんから高齢者に至る全世代の県民が「徳島の木の良さ」を再認識し、その魅力をまるごと体感できる「新たな木育拠点」として、徳島県立あすたむランド内の四季彩館を全面改修して整備するとともに、くつろぎ館（食堂）の改修やあすたむランド入口から美術館までの遊歩道の整備なども合わせて一体的に整備し、あすたむランド開園20周年記念事業として来年度秋頃の開館を予定している。そこで神山校も徳島木のおもちゃ美術館が学習成果の発表の場になる計画を企画している。神山における木育活動の期待を背負って引き続き地域連携に力を入れていく。



(図16)



(図17)

(2) 耕作放棄地を活用した「まめのくぼプロジェクト」【環境部門・食農部門】 ～耕作放棄地を畑として復活させた3年間のとりくみ～

1 はじめに

2019年度より城西高等学校神山校は学科再編と同時に文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業地域魅力化」の指定事業に認定され、「中山間地域の地域内循環モデルの構築」をテーマとして研究開発に取り組んできた。研究開発では、「1 神山創造学の再構築」「2 地域誠意を活かした質の高い教育環境の整備」「3 地域の生産・交流拠点の創出」「4 地域を学びの場とした実践」の4つに分け取り組んできた。「まめのくぼプロジェクト」は「4 地域を学びの場とした実践」の研究開発で、3年間実践の場として本事業の新たな取り組みとして行ってきた。教職員は、2019年度より「シードバンク」について学ぶスタディーツアーで神山町役場とフードハブプロジェクト並びに神山校教職員と他県の実践状況を把握してきた。既存の植物の種を保存しその地域の農業が受け継ぎ継続し栽培していくことを「シードバンク」という。神山町ではこれまで各農家が見つないできた種が農業をしない農家とともに失われつつある現状があり、「種の収穫と保存」という役割を神山校が担うという期待が町から出てきた。この様に周囲の期待もあ

り2019年9月より学校の近くの谷地区に通称「まめのくぼ」という耕作放棄地があり、地域住民からも是非個々の土地を学習活動で使ってほしいと依頼があり、当時、草刈りから始めた。初年度は雑草の株抜きから始まり、水路の修復そして石積みの修復作業に追われた1年目であった。

2 活動の目標

- (1) まめのくぼ耕作放棄地の環境整備を行う
- (2) まめのくぼ耕作放棄地の栽培を行う
- (3) 野生鳥獣がおよぼす農産物の被害対策を行う
- (4) 加工商品の開発に挑戦する

3 活動内容

- (1) まめのくぼ耕作放棄地の環境整備を行う

神山校は神山町に密着した唯一の農業高等学校で、約75年前に開校されてから時代の移り変わりとともに、定時制から全日制へ、農林科から造園土木科・農村家庭課程から生活科へと再編されてきた。2019年度より、農林業を基盤とする神山町と連携しこの土地で学び、未来を拓く人づくりの拠点として、神山校は【地域創生類】環境デザインコース／食農プロデュースコースへと学科再編した。造園や農業を学ぶ農業高校の専門課程を活かし、高校生が実習や授業外の活動として地域社会の取り組みに参画する場面が増えている。

神山町農業委員会の統計によると町全体面積114,060,002m²で耕作放棄地面積が1,061,795m²もあり約1%が農作物の生産を放棄していることが聞き取り調査でわかった。神山校の正面の山「谷地区」には昔、美しい田園風景が広がり、子どもたちの遊び場だったそうで、長らく人の手が入らず、管理もせず草木が生い茂っていて石積みも崩れた場所を環境デザインコースの生徒たちが畑として再生しようと試みているのが「まめのくぼプロジェクト」である。環境デザインコースはまず、下草刈りから始め昔の田園風景の姿が見えてきた。



図①下草刈り作業の様子



図②まめのくぼ耕作放棄状態

まめのくぼの面積は約1,500m²で10年以上管理をしていない。草丈は2m以上もあり雑草の根元は直径3cmぐらいの太い茎に生育しており、刈り払い機では一気に除草できない。50cm根元上部分を切断して残りの目の部分を刈り取るという方法で時間をかけて田んぼ1枚1枚を丁寧に助奏していった。なかには、樹木が育ち刈り払い機では伐採できないので、チェーンソーで伐採作業を行った。刈った草は学校の圃場に持ち帰り堆肥として有効利用しており、野菜苗などの雑草抑制となるように根元にマルチとして活用した。まめのくぼの植物は自然の恵みとなった。



図③水路の石披露で修復作業の様子



図④水路のまわりの除草作業の様子

元々まめのくぼの田んぼは傾斜地にある水田だった。頂上部から水のみち「水路」が流れており、水路を流れて1枚1枚の水田に水が流れる仕組みとなっている。放置されている水路は土石流が流れて道がふさがりダム状態となり、ダムからあふれ出た水は水田以外の場所に流れ水路の機能を果たしていない。また、石も崩れ雑草も生え水路の景観も形も崩れていた。まず、除草作業の後に石を拾うその後溝に詰まっている土や砂利を取り除き、水路を修復していく。水路が壊れている部分は水が横道をそれないように直しておく。



図⑤石積みの修復作業にかかる21HR



図⑥着実の石を積み完成させる様子

傾斜地の多いまめのくぼ地区は、ほとんどが棚田式の石積みの水田が主流である。石積みは傾斜地に広く耕作地を確保するためと水が均等にたまる目的で施工されている。また通気性もよく、水はけがよく作物を育てていくのには良い環境である。加えてこの地区は日当たりも良く地区の住民の話では作物を育てていくのには絶好の土地であるという。3年間で約100m近い石積みを修復してきた。1学年では石積み学校を開校し2日間、外部講師であるNPO法人石積み学校講師の金子玲大氏を講師に招き石積みの基礎や石積みの役割、重要性を学ぶ。2学年になると環境デザインコースになり専門的に石積み施工工事に取りかかり週2時間の作業で、まめのくぼ棚田を復活していく。

生徒からの感想は、「石積みを行う石を学校から運搬するのが大変だった。特に石積みの裏に入れる裏栗石が少なく毎時間、栗石や小さな石を確保するのが一番大変だった。」「できあがっていくイメージが出来たとき石の模様がすごく美しくきれいに見えた。」「できたら、3年生になって石積み作業を続けていきたい。まめのくぼの石積みを全部修復して、神山町上分の江田地区の棚田みたいに観光客が集まる場所にしていきたい。」などの感想が振り返りシートに記入されていた。

石積みは専門性が高く技術も難しく、地元でもなかなか「石工」の後継者もいなく石積みが崩れて危険な農作地が多い。石積みが変わるコンクリートの擁壁や石の間に「モルタル」を塗りつぶす「目潰し」を行う。このような工法は水はけも悪く、小動物や微生物も繁殖しにくく作物の生育にも多少影響を及ぼす。また、自然の景観の復活という観点では、いい景観とは言いがたいのが現状である。

(2) まめのくぼ耕作放棄地の栽培

全国的に農業従事者の高齢化が加速し、神山町内の農業従事者の平均年齢も70歳以上が大半を占めている状況となっている。社会的にも、後継者不足による耕作放棄地の増加は止められず、それにとまなう鳥獣害の被害や土砂崩れなどが大きな問題になっている。そうした状況を背景に、地産地食を軸に、地域で育て地域で食べることで食の循環による関係性を豊かにし、神山の農業と食文化を次の世代につないでいくことを目的として私たち神山校の食農プロデュースが令和元年度より開始した。



図⑦まめのくぼの畑に神山小麦を播いて6ヶ月が経過した状態

4月まめのくぼ、下の写真は昨年11月に播種した神山小麦が順調よく生育している状態である。鳥獣被害も害虫被害にも自然災害にも影響なく昨年度に比べ生育状況は良好である。

6月、大凡20haの面積に生育した神山小麦を2年生食農プロデュースコース14名が刈り込み鎌で1株ずつ収穫していった。収穫した麦は脱穀機で実を落とし1日掛けて天日干しを行う。乾燥後はゴミの選別作業を行い湿気の少ない場所で1ヶ月ほど貯蔵保存する。このとき選別した小麦の種に「ノシメマダラメイガ」「コクゾウムシ」の卵が幼虫となり袋の中で害をおよぼす。そのためには定期的に、天日干しを繰り返して害虫駆除していく必要がある。本年度は小麦約300kg収穫することが出来た。販売の内訳は、フードハブプロジェクトかまパンに100kg、神山ビールワイナリーに100kg、道の駅販売活動に30kg、小麦加工や種貯蔵に70kgである。販売価格は1kg単価250円で販売した。もちろん市場価格より割安で提供させていただいた。消費者からは、ゴミや石が入っていたので来年は工夫するとよいという意見が出た。



図⑧刈り込みを行う様子



図⑨収穫した小麦を運搬する様子



図⑩神山小麦の選別作業の様子



図⑪粉にしてふるいに掛けている様子

2019年から神山町谷地区の休耕作地をかりて、町内で70年以上も種をつないでいる神山小麦の栽培を、城西高校神山高地域創生類第一期生食農プロデュースコース3年生「鳥居千紘」さんがこの活動の集大成を、自身の課題研究プロジェクトとして取り組んだのが、「まめのくぼプロジェクト」の教材用副読本である。後輩や地域の方々へ届きますように、心をこめて制作した。

※まめのくぼプロジェクト冊子

『年間は長いと思いましたがいい思い出です。農業の実習は大変でありながらも、みんなで協力し合ってできた小麦で商品開発や、鳥獣対策のために柵を張ったりしたのが私にとっては楽しかったです。』（鳥井さんの感想）

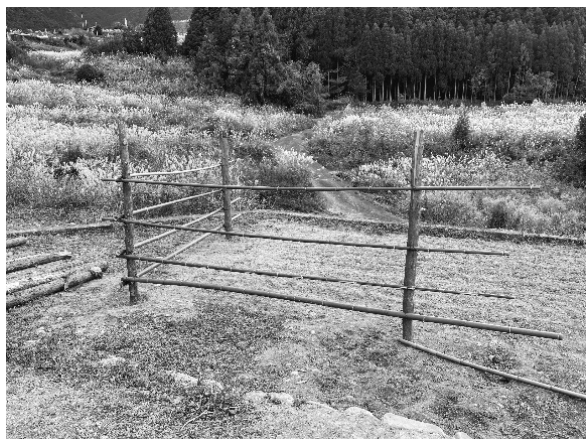


(3) 野生鳥獣がおよぼす農産物の鳥獣被害対策

シカやイノシシ、サル等の野生鳥獣による農業被害や自然生態系への影響が深刻化、その被害範囲も広域化しており、徳島県下はもとより神山町内の全域的な課題となっている。また、これらの被害は、営農意欲の減退や耕作放棄地の増加要因となっている。鳥獣被害が増加する背景としては、農山漁村の過疎化や高齢化が進行し、耕作放棄地が増加したことや、里山等における住民の活動が減少したこと等が挙げられる。また、狩猟者の減少・高齢化に伴い、狩猟

による捕獲圧が低下したことや、里山、森林管理の粗放化等により、野生鳥獣の生息環境が変化したこと等が考えられる。鳥獣被害は農業者の営農意欲を低下させるなどにより、耕作放棄地を増加させる一因となっているが、耕作放棄地の増加が更なる鳥獣被害を招くという悪循環を生じさせており、農村の暮らしに深刻な影響を及ぼしている。まめのくぼでも長年放置していたしわ寄せで、作物を育てていてもシカやイノシシの被害は止まらない。

このため、貴重な神山町の既存種子を畑にまいてもシカやイノシシなどの野生動物による被害が大きな壁となっている。この様に鳥獣被害の軽減を図るため、手作りの支柱や電柵を設置することを重要であると考えた。



図⑫杉の丸太支柱と竹のシカよけ防護柵



図⑬小麦畑に電柵を設置している様子

(4) 加工商品の開発に挑戦する

これまで、まめのくぼの栽培は神山小麦が6月下旬に収穫、神山ソバが11月に収穫する。神山小麦は2年生が学校の購買で販売する目的でコロッケや唐揚げの小麦粉として利用した。3年生ではクッキー・シフォンケーキ・パウンドケーキ・タルト・カップケーキを加工して商品開発に取り組んだ。商品開発にと取り組んだ生徒は「お菓子をたくさん作れて楽しかった」「工夫しながら作るのも楽しかった」「計画通りに活動するのは難しい」「状況がコロコロ変わったので情緒不安定になった」とのまとめを報告した生徒もいた。

ソバの加工は、種を収穫するのに時間がかかり、加工の粉にする工程までは進まなかった。次年度の課題として、石臼などの加工機材や、ソバの郷土料理に関わる職人の指導などが必要とされる。また、食品加工については、施設面が整っていないと、どうしても学校以外の企業や民家の施設をお借りするしか方法がなく、生徒は校外授業で学習していくしかないということが今後の大きな課題でもあり、計画していかなければならないことである。



図⑭小麦から制作したサツマイモカップケーキ

感想のまとめ

- ・お菓子を沢山作れてたのしかった
- ・工夫しながら作るのもたのしかった
- ・計画通りに活動するのは難しい
- ・状況がコロコロ変わったので情緒不安定になった

図⑮商品加工した3年生の感想のまとめ



図⑯ソバの花が満開10月撮影



図⑰ソバの実を収穫している様子

4 生徒の感想

今回の、まめのくぼプロジェクトで食農プロディースコース生徒からと環境デザインコースの振り返りシートから以下の感想が記述された。

「課題研究で得たこと」

地域創生類3年食農プロディースコース 中川 晴詠

私の課題研究のテーマは「お菓子を通して神山校のことを知ってもらおう」です。昔からお菓子作りが好きだったので何かお菓子作りに関する活動がしたいと考えていました。そこで、2年生のときに神山創造学の授業でしていた神山小麦を使った加工品を作る活動を活かして、それまでに作っていたものの他にも様々なお菓子を作りたいと思いました。しかし、課題研究の始めの方の授業で、自分がしたいことの他に地域や社会の課題も含めたテーマにしなければならないと学んだのでどのようなテーマにすればいいか悩みました。

地域の課題について考えてみると、地域の人と話していたときのことを思い出し、神山校のことがよく話題に上っていました。地域の方から「神山校って色々変わったことをしているよね。」という話をよく聞きますが、その「いろいろ」の詳しい内容まで知っている方は少ないのではないかと思います。そこで、地域の方に神山校についてもっと詳しく知ってもらうためにカフェを開いて、お菓子やその材料となる小麦などを通して神山校の活動を伝えることを思いつきました。

カフェを開くという目標が決まったので、まずはどのようなお菓子を作るか研究メンバーの岡さんと話し合いました。クッキー、パウンドケーキ、タルト、カップケーキなど作ってみたいものが沢山あって何がいいのか迷いましたが、すだちや野菜のジャムも作ってみたいということで、はじめにスコーンを作ることに決めました。以前、家で普通的小麦粉を使ってスコーンを焼いたときはおいしくできたので、同じレシピで小麦粉を神山小麦に変えて焼いてみました。しかし、焼き上がってオーブンを開けてみると、中のスコーンは理想とは程遠く少し焦げてほとんど膨らんでいませんでした。食べてみてもパサパサしていてスコーンとはまた違うものようでした。結果は失敗に終わってしまいましたが、この失敗から小麦粉の割合が多くバターや卵、牛乳などが少ないレシピは神山小麦とは合わないとわかりました。

スコーンのレシピはたまごやバターが少なかったため、次はバターの量を多めにしたタルトを作ってみました。生地はたくさん作ることを考えて型を使わずに1cmくらいの厚さに伸ばした生地を正方形に切って焼き、その上に生クリームとサイコロ状にし大学芋をトッピング

グしました。普通のタルトに比べると少し硬い気もしましたがサクサクしていてこれまでに作ったものの中では一番おいしかったです。タルトの生地が成功だったので、次はこのレシピを使ってクッキーを作ってみることにしました。ちょうどこの時にじゃがいもを収穫していたのでじゃがいもも使ってみたいと思い、砂糖を少なめにしたタルトの生地じゃがいもを潰したものとチーズ、塩胡椒を加えて、おつまみのようなクッキーにしてみました。じゃがいもを加えたことで少しもちもちしていておいしかったです。

次に何を作るか考えたり、試作をしたりしているうちに中間発表の準備をする頃になってしまったので、改めて活動について話し合ってみるとカフェを開くために課題がありすぎてどうすればいいのかわからなくなってしまいました。一番の課題は活動資金だったので「ふるさと納税の給付」に申請しました。

町長や役場の方にプレゼンを聞いて頂いた結果、審査に通ったので3万円の給付金を頂けることになりました。

2学期は夏休み中に考えてきたレシピの試作をする予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で調理実習が出来なかったため、どのような形でお菓子を提供するか話し合いをしました。当初は寄井商店街にあるテストキッチンで製造から提供までする予定でしたが、テストキッチンにはそうざい製造業の許可しかなく、お菓子を作って販売することが出来ないことが分かったので菓子製造業の許可のある「てくてく栗生野」でお菓子を作らせていただいて、それをテストキッチンで提供するという予定になりました。

10月になり調理実習ができるようになったので実際に提供する予定だったカップケーキとシフォンケーキの試作をしました。カップケーキは生地にさつまいものペーストを加えてしっとり焼き上げ、その上にさつまいものクリームを絞ってモンブラン風にしたものや、生地にすだちの皮を加えて焼いたものにクリームチーズとすだちで作ったクリームをのせたものなどを作りました。シフォンケーキはプレーンのものにさつまいもやかぼちゃ、すだちなどを使ったクリームを添えることになりました。

提供するものが決まったので、てくてく栗生野さんに施設を使わせて頂けるのか電話で伺ったところ、後日実際に行き話をする事になりました。てくてく栗生野に行ってみると、突然、「どのくらい出来るのか見てみたいのでまず作ってもらえますか」と言われたので驚きました。シフォンケーキを焼いている間に話をしましたが、私たちが思っていたよりも衛生的な問題でできることが制限されることがわかりました。はじめはケーキ屋さんのような形でしたいと考えていましたが衛生上難しいということでプレーンのものだけで予め包装してから提供するという事になりました。

はじめに考えていた計画から次々変更することがあって落ち込んでいたときに担当の先生から「この計画はひとまず保留」と言われたときは「…」となりました。状況が全く把握できなくて戸惑いましたが、後から聞いた話では私たちと先生とてくてく栗生野さんとのあいだに大きなすれ違いがあったようでした。

残り時間も少なくお菓子を作れる場所もなかったので、これまでの計画は諦めて今まで作ってきたお菓子のレシピを道の駅の販売実習で配ることと、以前作ったカップケーキを本校に作ってもらうこと、神山ビールのクリスマスマーケットで屋台のような形でパンケーキを作って販売することで活動を終わることになりました。

1学期から自分たちで計画を立てて活動してきましたが目標が大き過ぎたこともあり計画的に活動することは本当に難しいと学びました。頑張っただけに間に合うよう行動しても急に調理実習が出来なくなったり、施設が使えないことになったりして、その度にモチベーションも下がっていったのでやる気を保つのも難しかったです。ふるさと納税の給付金を頂

いたこともあり、何とか活動をやり遂げなければならないというプレッシャーのようなものがいつも頭の片隅にあったので2学期の課題研究の時間は気が重く1学期ほど楽しくは活動できませんでした。

課題研究の活動を思い返してみると大変だったことの印象の方が強いですが、最後のクリスマスマーケットに参加したことはいい思い出になりました。クリスマスマーケットも前日まで納得のいくパンケーキが出来なったり当日も生地がうまく出来なくて急遽今までと違う方法で焼くことになったり大変なこともありましたが、何とか目標だった20個を完売させることが出来たのでよかったです。初めて目標にしていたことを達成することができたので嬉しかったです。

これまで大変なことはたくさんありましたが、その中で「切り替える」ことの難しさと大切さを痛感しました。新しい課題ができるについ、ため息をつきたくなりますが、前向きに受け止めて課題の解決に向けて気持ちを切り替えることができるようになったらもっと充実した活動ができていたのではないかと思います。

これからの生活の中でも課題にぶつかるとは多々あると思います。その時に上手く気持ちを切り替えてもっと良くなるように行動できるようになりたいです。

まめのくぼ環境実習を終えて

地域創生類2年環境デザインコース 中野千代実

石積工をやっている中で私が学んだことは、昔の人のすごさだ。すごさ、と一言言ってもいろいろあるが、単純な力の強さと発想力や想像力の豊かさを特に感じた。

床掘をしていると、二人でも抱えられないような大きくて重たい石がごろごろでてくる。積まれた当時、どれくらい機械化が進んでいたか定かではないが、確実に今よりは人力が頼りにされていた時代に、どのようにして運んだのだろうか。そもそも現代を生きる人々よりも、日常から力仕事が多かったらうから、筋力が発達したのではと私は考えた。何を作るのでも頼りになるのは自分の体だけ、そして食べ物も豊富にあるわけではない。そのような状況下だったから、引き締まったからだで、知恵を絞って考えられた動きで、作業が進められていたのだらうと思う。時代の変化とともに、人間の身体能力は衰えていっているのかもしれないと思った。作業効率や安全性を重視している現代も決して悪くはないが、人体の限界に挑戦している人にはやはり引き付けられるし、この先の未来でもいなくなってしまうと思う。

また、そもそもなぜ石を積もうということになったのだらうか。古代から打製石器や磨製石器といったものが使われてきたように、昔の人々にとって石は何かを作る材料として現代よりも身近だったのかもしれない。確かに、土のように水で状態が変わることもないし、木のように腐敗していくこともない石は、かなり優れた資源だといえるだらう。そしてその積み方もこだわられていた。どの組み合わせ、どの角度が一番強いのか、長持ちするのか考えられて積まれたのだらうなということが、昔の石積みからは伝わって来た。

今も残っているものもあるということは、雨が降ったら、台風が来たら、地震が来たら、時間が経ったらということも想像しながら作られたのだと思う。それだけ先のことも見据えられる想像力に感心したし、昔の人が今まで残るように作ってくれたからこそ、私たちがその技術を学ぶことができるのだなとありがたく感じた。それと同時に、私たちの積んだ石積みが後世まで残り、昔の人の発想や技術を伝えられるバトンのような役割になると嬉しいなと思った。

今後あの場所は地元の人憩いの場所にしたいなと思う。昔ながらの景観を保持している場所として過去をなつかしんだりただただゆっくりしたりできるような落ち着いた場所にしたい。そのためにも杉で埋め尽くされた暗い空間は変えるべきだと思う。今も少しずつ進めているが、しっかりと間伐をし、光が入る林にしたい。また、もしできるのであれば、杉はほとんどを伐倒し広葉樹の林が理想だ。杉が多い神山で広葉樹の山に入れると、私はとても感動するし、わくわくする。その気持ちをもっとたくさんの人に感じてほしいと思うから、多種の広葉樹を植え光が入って紅葉も美しい場所にしたいと思う。今後、まめのくぼが町内の人にとって憩いの場所になるとともに、後世に過去や現代の技術や美しさを伝える場所になればいいと思うし、そのために努力していきたい。

地域創生類2年環境デザインコース 土居 龍生

私は、まめのくぼに行って前回、土を盛ったところが崩れていたから奥に床堀りをしました。石積みの現場には石積みをする後ろに川から持ってきた石がたくさんあってその石を集めることが大変でした。一番初めの土台となる大きな石を運ぶとき大きすぎてだめだし、高さや広さや奥行きを考えてみんなで選びました。力がある人でもなかなか一人では運べませんでした。僕は重い石を持ち上げたり運んだりすることで力が出なかったり、怪我をしたりするので転がしたり自分がある程度の持てそうな石を探しながら集めました。ぐり石を集めるとき、自分はみんなと集まって集めずにバラバラになって一人で集めました。肥料などの破れにくいビニール袋にぐり石を自分が持てる重さに詰め込んで地上に持ち上げるときも、上に上っている仲間と協同して持ち上げました。自分は、石積みを毎時間しました。石のけつと言って自分のほうに石の高さ盛り上がっている石を選びました。面が合って動かなかったり石と石の隙間に完全にはまったりしたらとても嬉しかったです。形が、いびつな石でもけつが上ったりその上や左右の面が合っている石でも積むことができることに驚きました。石積みを毎時間やっていくうちに、どの石がこの隙間に入るかなとか完成したときの達成感がありました。仲間と地面に埋まっている大きな石をシャベルで掘り進んだり自分が思い通りにいかないときに石を探して当てはめてくれたときに嬉しかったです。布積みと、谷積みを学びました。まめのくぼの石積みは、谷積みでできていて見た目がいいと思いました。簡単で丈夫なので作業効率がいいと気づきました。積めた隙間が三角形になっていたら石が三点でしっかりと固定されているのでその通りだと思いました。金子さんが来たときに話になかで、ちゃんと昼ご飯を食べて栄養を蓄えてエネルギーをためてから作業したほうが良いと教わりました。腰を痛めない石の持ち上げかた、無駄な力を使わない道具の使い方を教えていただけることは本当に助かりました。

5 活動のまとめ

土地を放棄してしまう理由はとして考えられるのは、耕作放棄地の主な原因が4つあることがわかった。1つめは「農業従事者の高齢化」農作業は、身体に負荷がかかるため高齢になると、続けるのが難しいという意見もある。神山町でも、主に農業で生計を立てている農業従事者のうち、65歳以上の割合は65%以上もあり、現在でも増加現象にある。2つめは「農業従事者不足」神山町でも農業従事者の高齢化が進み、リタイアする人が増える中、その農地を継いでくれる人がいれば良いが、残念ながら新たに農業に従事する人も減っており、後継者不足が深刻な課題となり町が将来世代につなげるプロジェクトとなっている。また何もない状況から、農業を始めようとする、土地の確保や農業用の機械などで高額な初期投資が必要なことも少なくないため、

新規参入が難しいと敬遠されている課題もある。3つめは「農産物の価格が低く利益が出ない」調査した資料の農林水産省「生産農業所得統計」によると、日本の農業総産出額は、生産量の減少や価格の低下等により、1984年の11兆7千億円をピークとして、農業所得が最大となった1990年には11兆5千億円、2000年には9兆1千億円と減少を続け、2008年には8兆5千億円となった。農産物価格が低迷し、利益の上がる作物が作れないと、農業を続けていくことだけでなく、生活を送るのも難しくなってしまうため、農業を辞めてしまう農家が多い。4つめは「鳥獣などに荒らされたから」野生鳥獣による農作物被害は、まめのくぼでも例が出なく特にシカの被害が多く収入も減少傾向にはあるが、被害金額は依然として高く、特に電柵機材にかかる被害額が大きくなっている。このことは地域農家の意欲の減少にも繋がっており、減少しているとはいえ、その被害金額以上に深刻な影響を及ぼしている。また、鳥獣だけでなく、台風や日照不足、冷害などの災害によっても農作物被害がもたらされることがある。

6 今後の課題

まめのくぼプロジェクトの耕作放棄地はさまざまな原因で年々解決していかねばならない課題がある。今後この耕作放棄地がもたらす問題点についてまとめた。

① 田畑が荒れていく

田畑として利用しないとしても、まめのくぼの土壌の質を維持するためには適切な管理が必要となる。耕作放棄地となり、農地として手入れをしなくなると、土壌はどんどん草や木が伸び荒れて、必要な栄養素が失われてしまう。耕作地を放置する期間が長くなればなるほど、荒れ方がひどくなるため農地に戻すのに時間がかかり、難しくなってしまうので計画的に整備していく必要がある。

② 雑草が生え鳥獣が住み付いてしまう

土地を農地として利用されている期間は、収穫する農作物に害虫が寄生したり、作物の栄養が雑草に吸収されて成長が阻害されないよう、害虫や雑草の対策をする。しかし放棄されてしまった農地は、あっという間に雑草が生い茂り、農業に害をもたらす虫が棲みやすい環境になってしまうので、定期的に除草作業を行う必要がある。また、中間山地の場合は、人が出入りしないと畑を荒らす野生動物が田畑に住み着いたり荒らしたりしてしまう。耕作放棄地が野生動物の棲家になってしまうと、そこを拠点に他の畑を荒らされてしまう可能性もでて来るので鳥獣対策は不可欠である。

③ 災害の危険性がある

実は農地には、洪水防止という機能がある。そのため、農地の優れた貯水機能を利用して、あぜに囲まれている水田や水を吸収しやすい畑の土壌に、計画的に雨水を貯留することによって、洪水対策として利用している取り組みもある。しかし石積みが崩れていたり、水路が破損していたりして耕作放棄地となってしまうと、農地が持つさまざまな機能が失われ、洪水の発生がおさえられなくなってしまう。この様な原因を解決するには石積みや水路の修復作業を続けていかねばならない。

④ 近隣のほかの土地に悪影響を及ぼす

まめのくぼのように、農地を放置してしまうと、雑草が生えて、そこに害虫や鳥獣も現れやすくなり、隣接しているもしくは近くの農地へも被害が及んでしまう可能性がある。また、農地の用水路の管理がなされていないと、不法投棄が増える原因にもなってしまう景観にも大き

な影響を及ぼす。不法投棄は、自然界への悪影響が懸念されるなど、近隣の民家や住民にまで被害を与える恐れがあり、生活に影響を及ぼす問題となるので継続して本プロジェクトを続けていく必要がある。

⑤ 農地集積を損害する

効率的かつ安定的な農業経営をする人に農地の所有権や耕作権を集約させることを「農地集積」という。耕作放棄地の地域にある農業をしている人が、農地の集積を考えることもある。そのときに農地が荒れていれば、農業を営む人はその土地で農業はしたくないと思ってしまうものである。そうすると、集積がうまくいかなくなってしまう。

以上、耕作放棄地まめのくぼプロジェクトでも継続した取り組みが大事であるところを学んだ3年間だった。



図⑱環境コース石積み完成の様子



図⑲3年課題研究で販売活動の様子

Ⅲ コンソーシアム会議

1 本年度コンソーシアム会議について

○第1回コンソーシアム会議

日 時：令和3年7月15日(木) 午後1時から午後4時まで

会 場：徳島県立城西高等学校神山校体育館

参加者：神山校教職員17名，地域協働学習支援員4名

コンソーシアムメンバー13名 カリキュラム開発専門家2名

内 容：全体会

(1) 講演 「広島県大崎海星高校の実例に学ぶ，コミュニティースクールの在り方」

CSマイスター 取釜 宏行 氏

(2) 報告 地域貢献活動の今までの取組と今後の在り方

神山つなぐ公社 ひとづくり担当 梅田 學

(3) 報告 森林ビジョンでの部活動の取組と抱える課題

城西高等学校神山校 指導教諭 丸山 稔

○第2回コンソーシアム会議

日 時：令和4年1月22日(金) 午後1時から午後3時30分まで

会 場：神山町農村環境改善センター大ホール他

参加者：神山校教職員15名，地域協働学習支援員4名

コンソーシアムメンバー11名 カリキュラム開発等専門家2名

内 容：全体会

(1) 「神山創造学のカリキュラム構成」「地域留学のねらい」

分科会

(1) まめのくぼプロジェクト：食農部門の取組と今後の展開

(2) まめのくぼプロジェクト：環境部門の取組と今後の展開

(3) 地域留学生のキャリア意識について

○第3回コンソーシアム会議

日 時：令和4年2月14日(月) 午後2時から午後4時まで

会 場：オンライン開催（城西高校神山校，神山町役場他）

参加者：神山校教職員17名，地域協働学習支援員4名 運営指導委員5名

コンソーシアムメンバー8名 カリキュラム開発等専門家2名

内 容：全体会

(1) 講演「持続可能な開発のための教育（ESD）について」

都留文科大学 特任教授 高田 研 氏

(2) パネルディスカッション

テーマ「これからの神山校の方向性（変化と継続）」 パネラー9名

(1) 第1回全体会報告

今回は，分科会は実施せず全体会のみであった。また，前回のコンソーシアム会議において，参加者より「生徒の意見を聞いてみたい」との声があり，2つの報告については生徒が行った。

① 講演「広島県大崎海星高校の実例に学ぶ，コミュニティースクールの在り方」

CSマイスター 取釜 宏行 氏

新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインで実施した。全国で34名いる文部科学省CSマ

イスターの一人である一般社団法人まなびのみなと代表理事である取釜宏行氏によるコミュニティー学校の在り方について講演が行われた。

CSの理解が深まり、一人一人の立場・役割を踏まえて、神山にとっての最適な形態の模索に向けて、スタートを全員が切りたくなるのが本日のゴールであった。

神山校と似たような状況にあった広島県の大崎海星高校の事例から、CSとは何かという話をしていただいた。

a CSを手段として使いこなす

コンソーシアムからCSへ移行していく中、議論を深めてよりよい形を模索してほしい。

b 学校と地域の水平的関係（win winの関係）

学校と地域は主従関係になりがちである。お互いにとって良い関係を考えていく。

c 高校魅力化＝地域魅力化

高校だけ魅力的になることはない。地域とともに魅力的にしていく。

（参加者コメント）

- ・「生徒にどんな力をつけさせたいか」を地域とともにしっかりと話し合い、互いにwin winの関係性を持てるような取り組みを実践的に行うことが大切であると再認識した。また、地域と学校の架け橋となるコーディネーターの存在がいかに重要であるかを改めて実感した。
- ・CSについて、地域とともにある学校づくり等を知ることが出来た。体験活動の充実、子どもたちが生き生きと生活できる場であることが大切だと思った。学校と地域をつなぐコーディネーターの役割の必要性・難しさを感じた。
- ・町内の小中学校も今年度からCSをスタートさせているところである。校種の違いはあれ、講演の話は参考になった。



② 報告 地域貢献活動の今までの取組と今後の在り方

神山つなぐ公社 ひとづくり担当 梅田 學

孫の手プロジェクトの活動について生徒8名からプレゼンテーション報告があった。

今年度よりサークル化し、教員主導型から生徒主導へと移行した。そのサークルのメンバーより孫の手プロジェクトへの参加理由および実施後の感想などが報告された。

サークルになったから、長期休業以外に活動できる、いい経験になると思った、自分のスキルアップになる、コミュニケーション力をつけたいなど参加理由は様々であった。

実施後の感想は、まだまだ機械の使い方が分からないので、機械講習会を受けたい。依頼主の「ありがとう」の言葉が嬉しかった。おじいちゃんとおばあちゃんと話をすることでコミュニケーション力がついた。などであった。

（参加者コメント）

- ・ミーティングの様子や本日の報告会への取組姿勢などを見て、何より楽しそうに活動する姿を

見て応援したい気持ちになった。

- ・自分たちでも出来る、やりがい、自分の役割がある。事前学習や準備を生徒がやることと、自分が責任を持った依頼先への意識、取り組み方が大切。今回の発表では『プロ』としての心得を学んでいることを実感した。
- ・高校生の考えや思いを実際に聞くことが出来、一人一人がしっかりとした考えを持ち、自分の意思で活動している姿は素晴らしいと思った。



③ 報告 森林ビジョンでの部活動の取組と抱える課題

城西高等学校神山校 指導教諭 丸山 稔

森林女子部の活動変遷について生徒25名よりプレゼンテーション報告があった。

森林女子部誕生のいきさつ、部活動として活動するようになった森林女子部の取組、活動などが発表された。

また、今まで少人数であったのが、1年生の部員が増えて、入部はしたが実践的な活動ができていないという、今抱えている課題についても報告があった。

森林女子部を指導してくれている阿部さやかさんからは次のような意見をもらった。タブレット、オンラインソフトを使って活動していければと考えている。来年度にはレーザーカッターが学校に入ってくると聞いている。皆さんのやりたいという気持ちが大事！その思いがあれば大丈夫。

(参加者コメント)

- ・森林女子は「森林ビジョン」の重要な担い手の一人だと思っている。長い間の取組で存在が確固たるものになっていると感じた。まさにリスペクトである。
- ・思いや考えをしっかりと表現できていることに感心した。地域みらい留学への取組は、生徒たちにとってもモチベーションの向上と自信につながる。
- ・「全国唯一の部活動」すごいことである。神山の林業のためよろしく願いたい。保育所の修了記念品では、子どもたちはいつも大喜びである。楽しみにしている。



2021/10/31

第2回コンソーシアム会議全体会

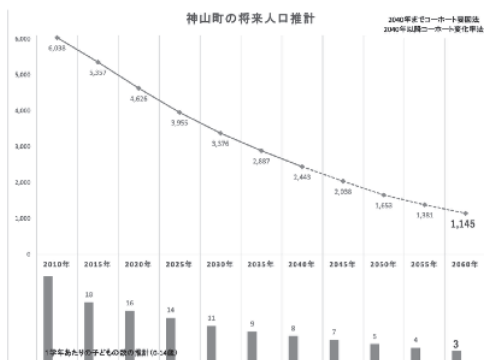
「カリキュラム構成と地域留学のねらい」

森山) 神山つなぐ公社の森山です。課題研究の社会人講師もさせていただいています。本日は私が前でずっと喋るのでなく、関わってきた先生や地域の方々の声を聞きながらそれぞれの視点を寄せ合いながら進めていきます。

神山創造学は2017年度にはじまって、今年で5年目です。2015、2016年頃から構想が生まれていますので、そのあたりも今日話していきたいと思います。また2019年度から神山分校が神山校に学科再編され、地域留学がスタートしています。いま3年目で神山校の一期生が卒業する、というタイミングです。同時に2019年度に文科省事業が採択され、コンソーシアム会議を続けてきています。文科省事業は今年度いっぱい終了しますが、来年度以降「コミュニティスクール」に形を変えて、学校と地域がともに歩んでいくことを引き続き進めていけたらと思っています。



神山創造学が生まれた背景について。遡ること2015年、神山町の創生戦略をつくるタイミングがありました。いま人口5000人程度ですが、このままいくと人口が2060年頃には1000人程度になる試算が出されました。



人口が減るといっているのはどういうことか、このまま何もしなければどうなるか、という成り行きが未来が示されました。一番はじめに起こるだろうと言われていたのが、神山分校の廃校。2020年頃には廃校になるのではないかとされていたので、いま私たちは違う未来を歩んでいると言えるかと思います。高校がなくなれば、生徒を運ぶバスも廃線になり、サテライトオフィスも、いずれ様々な公共サービスがなくなる。

そうでない道を歩んでいこうと神山町は考え、地域の人々で話し合っ創生戦略をつくっていききました。

「成り行き」の未来」

2015年創生戦略検討時点

- ・城西高校神山分校の廃校 (2020年頃)
- ・公共交通 (徳島～神山バス) の廃線
- ・契約数不足によるケーブルテレビ事業の撤退
- ・サテライトオフィスの撤退
- ・人口減少と財政上の理由による、近隣市町村への合併
行政業務は維持を中心に、新たな取り組みやハード整備はなし
- ・病院や商店、タクシー会社の撤退
- ・人口は2,400名 (2040年頃)
- ・最後の中学校と小学校の廃校 (2040年頃)

その頃にちょうど高校の先生方と役場、地域の方々が顔を合わせて話し合う場が持たれました。地域としては、町内唯一の高校として、良い学校として残ってほしい。これからのまちの姿と一緒につくってほしいという思いがありました。同時に高校としては、生徒たちを地域の中で学ばせてやりたいという思いを持っていらっしやう。両者の願いを聞くことができ、だったら一緒にやりましょうと活動が活発になりました。



本当に活発になって、ドドド。いまも続いている孫の手プロジェクト、集合住宅のどんぐりプロジェクト、フードハブとの連携でお弁当プロ

プロジェクト、民家改修の流れで裏山の伐採をしていただいたり、取り組みが生まれていきました。



地域とともに、授業の枠を使いながら取り組んでいくことをカリキュラムのなかに入れてしまおうということで、2017年度から神山創造学がつけられました。入学した1年生の段階から地域で学ぶことが当たり前になっていく。そういう授業を教育課程に組み込んでいきました。



当時の課題意識、神山創造学へ期待したこと

丸山) トップバッターということで、説明させていただきます。

7年前に、森林女子というユニットをつくりました。当時生活科3年生9人の女の子のクラスだったんです。担当していたのが課題研究という科目で、今年1年どんな研究する？と投げかけたところ「神山町を歩きたい、どんな文化あるか調べたい」と意見があがりました。「どんな飲食店があるか知らない」と言うので、アポをとって下分公民館行ったり、鬼籠野のすだち農家さんのところへ行ったり、役場で山の話の聞いたり。全部僕がやってたんです。

ある時生徒が「郷土料理つくりたい」と言うので、スキーランドの地中のおばちゃんのところへ行って「教えてもらえませんか」と言うんですけど、「いま忙しくて。来てくれたら教えてあげるのに」と。9人もスキーランドまで連れていけな

いな、できたら学校来てほしいのに。でも学校に来て教えてもらうのは、至難の業だった。輸送する手段がなく、来てもらうのも難しい。困ったなと考えていたときに、創生戦略でいろんなプロジェクトを立ち上げているという話を聞いて、これは絶対に学校も乗っかろうと、僕も勉強会に出たり視察に行ったりして。

つなぐ公社ができて、森山さんがいて、話しとる中で、役場のマイクロ借りていけます、まちの人を呼ぶこともできます、と上手にコーディネートをしてくれたんです。当時僕が一人でやりよったことが、森山さんや公社の皆さんが学校に入ってきてくれて、まちのことを教えてくれたり、いろんなプロジェクトのオファーをくれたりして現在に至っとるんです。

創造学ができたのも、当時の9人の子たちがやっていたことを肉付けして改良して現在に至っている、というのが本音です。時々、プロジェクトの報告会で僕は「ぐるぐる巻きにされとる」と言うんです。つながれてつながれて、ぐるぐる巻きにされて、紐をひっぱるとどこかにつながる。生徒も一緒なんです。まちの中でコミュニケーション取っていく中で、「こんな人とつながるとんじゃ」「これ知っとる」ってなる。まちぐるみで学校なんです。僕ら教員と公社メンバーと地域の人がつながっているのはそこからはじまってる。

生徒に対して、ぼくが一番大事にしているのは協働。これは創造学の柱の一つ。入学して、人間関係もまだできていない、高校がどんな感じかも全然わからないときに、チームで一つの目的をクリアする体験学習をやっています。解決するために協働を大切にしましょうと言って。カレーをつくるにしても献立を教えない。薪とライターしか渡さない。みんなで調べてごはんを炊いて、相談してつくる。僕は火起こしが得意、僕は料理が得意、僕は片付けする、とグループのなかで自分ができる役割を探させるのが目的。それで協働を教えて、創造学につなげる。生徒にはグループで話し合ったり、どんな考えをしているかを教えているのが神山創造学です。

森山) 丸山先生が大事にされてきた「協働」を引き継いで実際のカリキュラムに入れ込んだのが神山創造学かなと思います。

神山創造学は下手すると、高校生がやたら地域に出て行っている授業、と見られやすい。それは

それで事実で、大事にしていることですが、一方で神山出身ばかりでない生徒たちが神山を知ってどうなるの、何のために地域に出てるの、と思うと思います。何のためにやっているかを、授業者側がしっかり言葉にして彼らにも伝えるし、先生が共通で握っていきこうとまとめたのがこちらです。

3つの力を育もうとしています。まず、伝える力。自分の感じたことや思っていることを言葉にして、あるいは別の形で他者に表現していく力。伝えるだけでなく聞くことも大事だよね、ということも含めてコミュニケーションの力。そして協働する力。そして深める力。体験して楽しかった良かったですと終わらせず、そこからもう一步深めて、社会全体で見ればどうなんだろう。体験から学ぶ力。これらは社会に出たときに、自分の頭で物事を考えて人と関わり合いながら生きていくうえで大事なことだよ、と伝えています。

あと、ここはあまり生徒には伝えていませんが、すだちの中身、見えない力も創造学では大事にしています。いろんな大人に出会い、場所を訪れることで、いろんな刺激を受けます。そのなかで感性や好奇心を育んでもらいたい。何かやってみることを通してできたときに自信につながっていく。その積み重ねを経験してほしい。これは先生たちからよく出てくる言葉です。目に見えるものではないけれど、培っていききたいという願いを込めています。



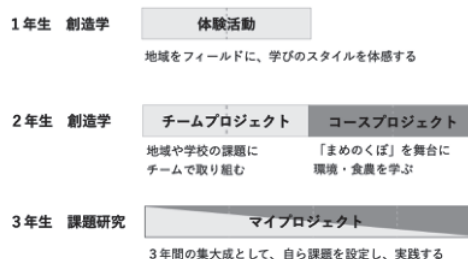
構成として、1年生は2コマで体験活動として地域を訪れるフィールドワーク、しごと体験、おじいちゃんおばあちゃんの話聞く聞き書き。話す、発表する、話し合うといった学びのスタイルをトレーニングしてひたすら積んでいく。

2年生になるとそこから発展して、チームで1つのテーマを掲げて学校や地域の課題に取り組む。新たに2019年度から増えた2単位では、まめのくぼを舞台に、環境・食農に分かれて学びを深めています。

「まめのくぼ」を舞台に環境・食農を学ぶ



3年生では課題研究を4単位で。2年生で取り組んだものを融合する形で、マイプロジェクトにしていく。これまで学んできた環境・食農の分野をテーマにする子もしない子もいますが、農業高校の専門性をかけあわせて、集大成として自分でプロジェクトをつくって実践しています。



神山創造学は神山校の核であると先生方が言うてくださることが多いんですけど、農業高校としての専門性、普通科目、そしてキャリア教育のかけあわせの授業です。授業によって濃淡がありながらもどれにも関わっています。



神山創造学で大切にしてきたこと

森山) ここで、1・2年生の神山創造学を担当している梅田から、授業で大切にしてきたことを話してもらいたいと思います。

梅田) 高校生には、ちゃんと違和感を覚えたことを言葉にしてほしいなと思って授業をしています。

なので学期末ごとに「授業と、前に立って話をする僕に対して、違和感を覚えたことを言葉にして伝えてね」と付箋にフィードバックを書いてもらうようにしています。例えば「この授業を自由につくっていい割には、レポートの形式が決まっています。書いて書きづらい」「どういう評価をされているのかわからないので示してほしい」、僕に対しては「ちょっと早口」「もっと要点をまとめて話してほしい」「時折、先生より偉そうなときがあるのでどうかしてほしい」など、率直にいろんな言葉を投げかけてくれています。それに対して、変えられることは「こう変えていくね」と伝えるし、変えられないことはその理由を添えて答えています。1学期末にももらったコメントは2学期の冒頭の授業で伝えるようにしています。

なぜこういうことを大切にしているかということ、違和感をちゃんと思い浮かべて人に伝えることができる、世の中に出たときに、違和感が課題になって自分の取り組んでいく仕事になっていくんじゃないかなと思っているからです。違和感が言えない雰囲気だったり、「変わっていかないなら言わなくていいよね」なんて雰囲気はつくりたくないなと思っていて。すべてできているかはわかりませんが、常日頃大切にしながら言葉にできる雰囲気・環境をつくることを心がけています。

森山) 違和感を表明できるというのは、その場やそのクラスでの安全性というか、梅田さんへの信頼がないとできないことなので、そういったことを大切にしているんだなと思いながら聞いています。

生徒の受け入れを続ける理由

森山) 続いて地域側の目線から、生徒の受け入れを続ける理由を聞かせてもらいたいと思います。

辰濱) Sansan株式会社の辰濱と申します。生まれは徳島ですが、育ちは関西でした。よくおばあちゃんの家に戻っていたので、徳島にソフトウェアの会社があることを知っていて「中学生の頃から徳島でもソフトウェアの仕事ができるんだ。東京・大阪に行かなくていいんだ」というのを知っていました。いざ仕事を選ぶときに、満員電車し

んどいし、そういえば徳島で働けるなというのを思い出して、徳島に就職して今に至っています。

仕事を考える年頃の子たちに「こういう働き方があるんだよ」と伝える立場になったなと思っていて、それで高校生には仕事の時間を割いてでも「こういう仕事があるんだよ。こういうところでも続くんだよ」と伝えられたらいいなという思いがあります。

それだけでなく、メディアを見るとサテライトオフィスってキラキラして優秀な見えるけど、自分は高校時代は赤点ばかりでした。けれど好きな教科や部活はがんばった。そういうことをオープンにしてできるだけつながれる機会を増やしていこうと思っています。そのなかで去年、一昨年は学園祭に出してもらったり。今後もそういうつながりを持ってたらと思っています。

森山) お金にならないと言ってしまうと身も蓋もないですけど、仕事の時間を使って受け入れてくださっているわけですよね。それは伝えたい思いがあつてのことだという話だったんですが、逆に生徒から受け取っているもの、やってみてよかったと思うことはありますか。

辰濱) 創造学では高校生に自分の口で伝えることを大事にしているという話があったので、「自分も高校生に自分の思いを伝えなきゃ。良いお手本にならなきゃ」と刺激されています。高校生が国際交流していたり草刈りしている様子を見て、自分は国語と英語は苦手だったんですけど、高校生ができていんだし、自分もできるようにならなきゃと刺激ももらったのは大きな変化でした。

森山) 辰濱さんが草刈りをめちゃくちゃ熱心にやっているのは高校生の影響もあるのかもしれないね。

辰濱) あります。

神山創造学が始まって感じる生徒や学校の変化

森山) 家庭科ご担当の杉山先生です。創造学がはじまる前から赴任していて、創造学もそばで見えました。はじめてから感じる生徒や学校の変化についてお話してください。

杉山) 7年目になります。神山分校の終わりと神山校の最初にちょうどいます。

いろいろな人に伝えているんですけど、自分を表現できる生徒が本当に増えてきたんじゃないかと思っています。「見えない力」のところにあった「自信」「感性」「好奇心」を持てる生徒が増えてきたかなと、率直に思います。わかりやすく言うと、中学生の頃はどちらかというところの中心でなく、中心の子に言われるまま動いていたような子が、自分の意見をしっかり表現できている。

学校の変化は、私たちはいろいろな人に支えられているんだということが、より分かるようになったのかなと思います。創造学や課題研究以外にもいろんな外部講師の先生に助けられています。エンカル消費で笹川さんに毎年お世話になっています。先生が「こんな言うたら迷惑かな」「負担かな」「でもお願いします」と言えるようになってきたのかなと思います。

森山) 先生からもヘルプを出しやすくなったと。続いて保積先生から。

保積) 私も神山校7年目になります。創造学がはじまる前から赴任していたんですが、その頃は生徒が何か活動したり発言するときは、限られた生徒が前に立つことが多かったように思いますし、私自身も決まった子に声をかけることが多かったように思います。どちらかというところマイナス的に考えている生徒がいて「この学校に来たくなかったけど来た」「どうせ自分ではできん」といった言葉を口にする生徒が多かったように思います。

それから創造学がはじまり、少しずつ、限られた生徒でなく全員が人前で発言をする機会が積み重ねで増えていったことにより、ほとんどの生徒が、程度の差はあれ、人前で話すことに抵抗感が少なくなっているのではと思います。私自身、普段の国語の授業だけでは気づかない生徒の発言、興味・関心、特技などを知ることができ、うれしく感じるが増えてきました。今まで以上に生徒のことを多面的に見ることができるようになって。可能性の幅を私自身「ここまでかな」と勝手に決めているところがあったんですが、広い枠で見て声かけなど心がけるようになったかなと思います。生徒自身も、活動のなかで自信をつけてきているように思います。

森山) 大人の会議の場で「会議の質は参加者の発言量のバランスだ」と言われることがあります。誰

か得意な生徒だけが話すのではなく、一人一人が話す場をできるだけつくる、うまくいなくても繰り返し練習していく、ということを実は授業の中でよくやっているんですね。

地域留学のねらい

森山) 続いて地域留学の話に移ります。

創造学をつくと同時に、神山校のこれからをどうしていこうか、何を目指していこうかという話が、2017年度に半年以上かけて行われました。このとき高校からは校長先生と教頭先生、役場から町長、副町長、教育長、フードハブから真鍋さん、白桃さん、樋口さん、公社から榎谷さん、西村さん、私で勉強会を繰り返していた時期がありました。

地域の課題は何か。その中で神山校はどんな役割を果たせるか。地域からどんな期待があるか。そういったことを掛け合わせたテーマで勉強会を6回ほど続けてきました。既に学科再編を行った地域の例から生じた軋轢やうまくいったことを聞いたり、「文化的景観」や「環境保全型農業」といったキーワードをもとに勉強したり、当時校長先生だった安永さんに語っていただいたり。

2018 神山分校魅力化ミーティング

高校・役場・フードハブ・公社で合同勉強会

- ① 阿波百高校の事例から見る学科再編 …都留文科大学 高田研さん
- ② 「文化的景観」と神山分校の役割 …奈良文化財研究所 恵谷浩子さん
- ③ 「環境保全型農業」の実践 …東京工業大学 真田純子さん
- ④ 20年後の社会 …城西高校 安永潔校長先生
- ⑤ 神山町の森林の現状と神山分校への期待 …神山町林業活性化協議会 高橋幸次さん
- ⑥ 学校視察(きのくに国際高等専修学校、大阪府立松原高校、愛農学園)

同時に、30~40人くらいで勉強会の内容や学科再編の方向性を、保育所・小中学校の先生や企業の方々、生徒にも参加してもらって、みんなで話し合う場を持つてきました。



勉強会や明日会の様子、この経験から受け取ったもの

森山) この流れから学科再編に行き着くわけなんですけれど、当時の様子を知る人は限られています。安永先生と樋口さんから、当時の様子やこの経験から受け取ったものを聞かせてもらえますか。

安永) 安永と申します。やっさんと呼んでください。2015年から3年間ここで勤務させていただいたんですが、その頃は県から言えばまだまだ少子化の影響を受けて高校の再編が進んでいる時期でした。腕を組んで座っているだけではつぶされてしまう可能性があった。ましてや、神山校は分校ですから、統合はなく、廃止という形になります。そういうわけにはいかなかったという現状がありました。

そういう状況で学校に来てみたら、先ほど丸山先生からあったように、すでに外に向いて、大きく動き出していた。まちを見れば、学校とまちとつなぐことをやってくれていた。そして将来にまちをつないでいく動きもある。ちょうどそういう時期だったわけです。これまでの私の経験からいえば、止まっている学校と動いている学校がある。学校まわってみたらよく分かる。止まったら、いつ首を切られるか分からない。けれども、この学校は動き始めている。

勉強会では、神山町そして伝統文化の大切さを再認識させられました。勉強会や明日を考える会を通して、結果的に学科再編が行われました。学科再編をするために絶対になくしてはならないものが一つあります。それは地域の人の熱い気持ちなんです。分校に対する熱い気持ちを感じられた。だから踏ん切れた。学科再編に行き着いた。という気がします。いま思えば、特別なことじゃなくて、そうした自然の流れのなかで学科再編が行われていったのかなと。

樋口) いまは2年生と3年生の授業に社会人講師として入っています。

当時(2017年)はフードハブの社員として会に参加させてもらっていました。フードハブに入る前は学校で働いていたという経験もあったので、学校という場所が地域の人がすごく入りづらい場所だろうなとずっと感じていました。明日会に参加させてもらったとき、地域の人にとって関わりしろがある学校ってすごくいいなと感じました。

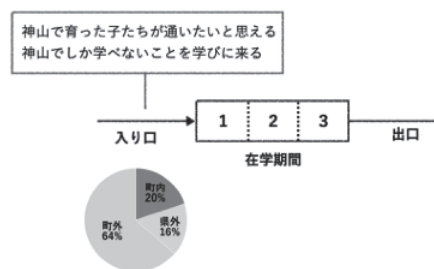
この中には大人だけじゃなくて高校生もいて、高校生の声をちゃんとまちの人が聞ける場自体があたたかないなと思いました。学校への期待というのはつまり子どもたちへの期待で。ベテランの大人から高校生までと一緒に考えている場というのが、熱くてじんわり、毎度ちょっと涙が出るような場面もあったかなと、思い返します。

そういう場に関われたのはいまも私の中に残っていて、こういう風と一緒に作る場が地域に存在していて、それが公立学校であるということが、とても大きなことなんじゃないかなと思っています。

森山) 当時の様子を知っている二人に話してもらえこの場がとても貴重だなと思っています。

明日会でかわされた話はたくさんあるんですが、今日は一つだけ、地域留学につながる場所をお話します。

神山校の「入り口」と「出口」があるとして、「ここしか行けない」と言われて来ましたという子が結構いるという課題感を先生方から聞いていました。町外からにしろ、町内からにしろ、「ここに来たくて来た」という生徒を増やしていきたい、そういう学校になっていくといいよね、という話が明日会で交わされていました。地域からすると「地域の子が行きたいと思える学校であってほしい」という願いがありましたし、外から来る子からしたら「神山がいい」「神山でしか学べないことを学びに来る」という学校になっていくといいなど。そういう学校が実現すると、町内からの進学率が上がったり、徳島を飛び越えて県外からあえてここに来る子が、アプローチしたら結構いるんじゃないか、みたいな仮説を持って地域留学がはじまっていきます。県外から来るようになると、地元からの見え方も変わるんじゃないかという話をしていました。



実際に受け入れると、たくさん来てくれたんですね。2019年度からスタートして、全国津々浦々から。県外だけでなく、鳴門や脇町からも来てくれるようになりました。



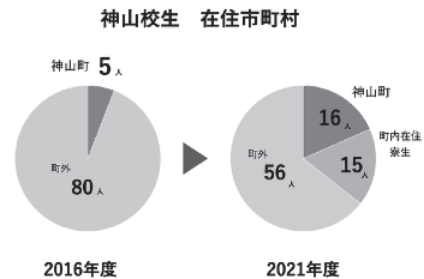
関わる大人が年齢も経歴も多様な大人がいるところ、暮らしをつくることを大事にしているんですけども、本当に毎日話し合っているんですね。日々の食事や掃除当番、月1では全体会議をスタッフと寮生で。それぞれの心地よいベースは違うので衝突することもあるって、それをどうするか話し合う経験を重ねています。



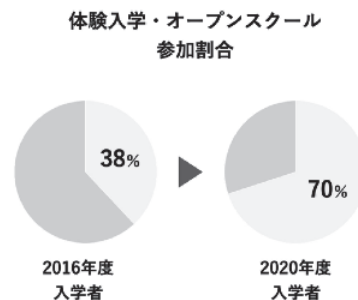
もう一つ大きいのは、食事づくり。一般的な寮だと食事が出てくるんですけど、あゆハウスでは朝晩のごはんを自分たちでつくっています。



2016年時点では町内からの進学は1割に満たなかったところが、いまは町内進学と寮生を合わせて3割以上が町内に暮らしています。



体験入学やオープンスクールの体験割合にも表れています。事前に訪れて、神山町や神山校の様子を見て「面白そうだな」と思って入学してくる子たちが増えています。



地域からの反応

森山 あゆハウス担当の秋山から、寮が生まれて地域からどのような反応があるか話してもらいたいと思います。

秋山 立ち上げの時期から関わって、運営にも関わっています。多様なハウスマスターがあゆハウスに関わっていて、それが寮生と地域の入り口になって多様な関わりが生まれているなと思っています。

もちろん授業でも地域との関わりがあるんですけど、最初に広げてくれるのがハウスマスターだなと思っています。例えば地元出身の60代のスタッフが毎週水曜に卓球サークルに行っているんですけど、そこに寮生も行く。これまでは同年代でやって

いたのを高校生という若い世代が参加するようになって、3年目になっても参加しています。

ハウスマスター 3名



食育スタッフ 3名



<年齢>
20代～60代
地元出身・移住者

<経歴>
・映像制作
・保育士
・パン職人
・シェフ
・不動産関係
・地域おこし協力隊

すだち農家さんが人手不足だとハウスマスター経由で声かけがあって、この夏は10人ばかりの寮生がすだち収穫を手伝うことができました。地域の方からも、まちに関わってくれる高校生が土日を含めて増えていることに「有難いなあ」という声を聞いています。

ここから10分くらい奥に行くと上分の江田という集落があるんですが、そこで米作りをしているハウスマスターがいて、寮生も関わっています。3年目に地域の方が言っていたのは「1、2年目に自分たちが教えたことを、いまは3年生が新入生に教えている。しかも教えた通りに、後輩たちに教えてくれていて。ここでお米をつくるということがどんどんつながっていているなあ」と喜んでくださっている声をお聞きしました。

それ以外にも、神山で過ごす高校生が増えて、アルバイトという働き手としてもまちで見えるようになったなあと思っています。鮎喰川コモンと呼ばれるまちのリビングが1年前にオープンしたんですけど、高校1年生がアルバイトで来て来ています。彼が来るまでは小学生はパソコンに向かってゲームをしていたんですが、高校生が来てからは外で遊んだりものづくりをしたり、遊びの幅も広がっていて、子どももスタッフも「高校生が来てくれてよかった」と話していました。

森山) 神山で暮らす子が増えて生まれてきた新しい風景を話してもらいました。

県外・遠方生の存在がもたらす影響

瀬部) この学校に赴任して3年連続1年生を担当させていただいています。

県外生や遠い県内から来る子が入ってきて、大きく変化したと思うことは私自身はあまりちょっ

と感じていませんが、これまでは「神山校しか行けない」と言われて嫌々来ていた子が多かったんです。最初の面談で「どうしてうちに来たん？」と聞くと、「ここしか行くところないって言われた」と言う子が多かったのが1年目。3年目の1年生に話を聞くと「来てみたかった」という子もちょっと増えて来たかなと感じているところです。

なんで増えたのかなと色々考えてみたんですけど、県外から来る子はここが第一志望でどうしても来たくて来る子が多い。そうなると周りの子も「あ、ここって結構いい学校なんかな」「面白い学校なのかも」とプラスの反応があったのかなと。少しずつそういう反応が出てきたように思います。

森山) 県外だからというより「ここに来たい」という第一志望の子が増えてきて、周囲が「意外といいかも」と思うようになってきていると。

神山校への期待

森山) 続いて、県教育委員会の中川先生から。神山校にも長くいらして、いまは県教委の立場から関わっていらっしゃいます。ここまで神山校を見て、そしてこれからの期待を語っていただけたら。

中川) 教育委員会に行くまで9年間、神山校にお世話になりました。今日改めて話を聞いて「そうだったんだ、そういう時だったんだ」と、その時の思い出といいますか、様子が蘇ってきました。

話の中にも出て来たんですけど、生徒が変わってきたというのは実感としてあります。課題研究は丸山先生が中心になって5年くらいずっとやっておるんですけど、最初は手探りの状態で、クラスの中の生徒に原稿を書いてもらって発表するというような感じでした。それが4年、5年目となりまして、関わった全ての生徒が自分で資料をつくって原稿をつくるようになって。もちろん先生のサポートはありますけれど、自分たちの力でできるだけ運営から発表までやれるようになっていて、レベルも上がって来たなと思っています。去年の3年生は自分も見て来た生徒なので思い入れもあって、がんばったなあという気持ちで聞かせていただきました。今年地域創生類の一期生が卒業ということで、発表会非常に楽しみにしております。

先生方から発表していただいた通り、地域の方々からのサポートもあるんですけど、生徒の気持ちや意志のウェイトが大きくなってきたなと。1年から3年まで勉強していく中で、社会に出て行くために必要な力が身につけていっきよるなというのを感じています。

神山校の良いところの一つは、生徒を大事にするところだと思っています。それを基本に、来た生徒を育てることを期待したいと思っています。お答えになっているかわかりませんが、そういうところで捉えています。

森山) 人数が少ないから細やかな関わりができると言われるところもありますけれど、先生方の一人ひとりの生徒を大事にする思いがあってこそだなと思います。

ここまでの話を聞いて

森山) 最後に、今年度から文科省事業の担当になっていただいた佐野さんから。当初は情報量が多かったと思うんですが、これまでの会議や今日の話の聞いての感想をいただけたらと思います。

佐野) プロジェクトチームの会議に月に一度神山校に来させていただいています。最初はどういうところかも分からないので、4月の頭に子どもを連れて来ました。学校の位置を確認して、食事をとったのがはじまりです。2回目の会議の時に、まめのくぼまで連れて行っていただきました。

最初は聞くことで精一杯で、それでも神山校の取り組みが充実されているといいますか、先生や公社の方々の「生徒にこんな体験をさせたい」

「こういう力をつけて行ってほしい」ということを皆さんで共有されていて、そのためにどうしたらできるかを実際に行動に移しているところが素晴らしい、素敵だなと思ったことを覚えています。

私も去年まで学校現場にいましたけれど、したいと思っても「なかなか大変かもな」と足踏みすることもありました。神山校さんは「やってみよう」「動いてみよう」となるのが本当にすごいところだと思います。生徒はそういうところから伸びて来たんだなと思います。生徒が今後卒業されたあとも、神山、徳島などでこれからの社会で生きていくための力を身につける取り組みだなということが素晴らしいと感じています。

来年度以降はコミュニティスクールとして動いていけると思いますが、地域とともに、地域に開かれた学校としての取り組みをどんどん進めていかれるだろうと。それから生徒自身がその地域で生きていく、社会で生きていく力をつけていく学校になるだろうということを感じていますし、続けていっていただきたいと期待しております。私自身も良い経験をさせてもらっていると感じています。

森山) 関わる前に、神山町やまめのくぼに足を運んでくださるその姿勢が本当に素敵で有難いなあと思って聞いております。これから徳島県内全体でコミュニティスクールが進んでいくところですが、神山で既に培ってきたものがありますのでそこを大事にしながら、実態の伴うコミュニティスクールになっていけたらと思います。